

## 保育者養成における総合表現「オペレッタ」での ICT を活用した授業の開発

藤澤智子\*<sup>1</sup> 尾崎公彦\*<sup>1</sup> 青井則子\*<sup>1</sup> 入江慶太\*<sup>2</sup> 重松孝治\*<sup>1</sup>  
岡正寛子\*<sup>1</sup> 松本優作\*<sup>1</sup> 種村暁也\*<sup>1</sup> 中川智之\*<sup>1</sup> 橋本勇人\*<sup>1</sup>

### 要 約

2020年度、新型コロナウイルスの影響により、遠隔授業が余儀なくされた。学生に学びの機会を提供し続ける方法について模索する中で、Information and Communication Technology (ICT) を活用した指導方法に着目した。本研究では、総合表現オペレッタ授業におけるICTを活用した授業実践を報告し、学生への調査からその成果について考察することを目的とした。授業は、3年次生88名を対象にオペレッタ公演に向けて指導を行った。授業形式は、遠隔形式および対面と遠隔のハイブリット形式で実施した。結果、指導に対する学生の満足度はおおむね高く、ICTを活用した授業を実施したことは意義があったといえる。場所を選ばず、いつでも視覚的・聴覚的に多くの情報をやり取りできるというICTの利便性は、学生の個別活動の一助となり、また、時間的・環境的な制約のある中で、学生同士が共同して作品創りを進めていく上での強みとなった。一方、通信環境によるタイムラグは、非言語的な表現部分における指導や、歌唱、楽器演奏等の音楽表現に関する指導は困難であった。また、実際に舞台上で演技をしながら、より良い表現方法を模索していく過程の指導は、対面で行う必要があり、それらは遠隔指導の限界であることが示唆された。

### 1. 緒言

A大学B学科では、3年次に「総合表現指導法Ⅱ」の授業を開講している。この授業は、保育者として必要な感性・想像力・表現力を養うため、学生がこれまで学んできた基礎的な造形表現、音楽表現、身体表現、言語表現を総合的に表現する活動としてオペレッタを制作し、公演を行うものである。さらに、共同制作による創作活動に必要なコミュニケーション能力や共感力を高め、様々な配慮や制作態度について学んでゆく過程を通して、演劇的経験指導に必要な実践力と指導能力を身につけるための科目として位置付けている。

保育者養成におけるオペレッタ制作は、オペレッタの制作を通して、保育者にとって必要な表現力やスキルの向上が見られることや、団結力や協調性等の人間性を養う格好の活動であることが報告されている<sup>1,3)</sup>。こうした表現系の演習科目においては、

表現技術は主として模倣や口伝を通して対面関係で人から人へと伝承する事例も多く、学生同士が試行錯誤を繰り返しながら作品を磨き上げていく過程が重要となってくる。しかしながら、今般の新型コロナウイルス感染症予防対策に伴い、多くの大学では遠隔授業の実施を余儀なくされた。B学科においても、全てが手探りの状況の中で、学生に学ぶ機会を提供し続ける方法について、試行錯誤を繰り返してきた。そのための方策としてInformation and Communication Technology (以下ICTとする)を活用した指導方法に着目した。

ICTの活用については、新型コロナウイルス感染対応への取り組み以前から、高等教育におけるICT活用や遠隔教育として、学生が主体的に学修するアクティブ・ラーニングへの展開やAI時代に対応できる能力の向上等をねらいとして推進されてきた<sup>4)</sup>。このことから、大学教育におけるオンラ

\*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 子ども医療福祉学科

\*2 新見公立大学 健康科学部 健康保育学科

(連絡先) 藤澤智子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail: t.fujisawa@mw.kawasaki-m.ac.jp

イン化の波は、緊急事態による一過性の対応ではなく、今後のウイズコロナ時代の「常識」として定着していくのは自然な流れになりつつある。

また、保育・幼児教育におけるICTの活用に関して、教職課程コアカリキュラム<sup>5)</sup>では、情報機器及び教材の活用を、保育内容の指導法と保育の構想の到達目標としている。保育者養成教育においても、情報機器に関する理解や使用だけでなく、ICTを実際の保育に活かせる能力を習得するための教育指導法の開発が求められている。

そこで本研究では、従来、対面でしか実施されてこなかった「総合表現指導法Ⅱ」オペレッタ授業において、ICTを活用することで遠隔でも指導ができる可能性を探ることをねらいとした授業実践を報告する。また、学生への調査からその成果について考察することを目的とした。

## 2. 授業実践

### 2.1 事前準備

遠隔授業の実施を視野に入れて、まず、学生の通信環境およびICT機器の利用状況を調査し、履修者全員が遠隔授業に参加できる状況にあることを確認した。使用するWeb会議システムは、学生のデータ通信契約量および通信環境等を鑑み、通信量が比較的軽いといわれていたZoom (Zoom Video Communications, Inc.) を採択した。A大学では、2020年度時点において、Keli (Moodle3.31) をもっていた講義支援システムが整備されており、本授業においても授業資料の提示や課題の提出等に使用することとした<sup>†1)</sup>。また、動画等の共有にはMicrosoft Stream を用いた。

### 2.2 授業概要

筆者らは、「総合表現指導法Ⅱ」オペレッタ授業は、保育者にとって必要とされる豊かな感性や表現力などの要素に加え、社会人として必要な対人スキルを身に付けることができる科目であると位置づけている。授業のねらいは以下の3つである。①学生同士が共同制作を通して、造形表現（舞台装置、衣装）、音楽表現（歌、効果音、BGM）、身体表現（演技、ダンス）、言語表現（脚本、台詞回し）等を実践的に応用し、技能や知識を深めてゆくこと。②共同制作による創作活動に必要なコミュニケーション能力や共感力を高め、様々な配慮や制作態度について学んでゆくこと。③それらの活動を通して、演劇的経験指導に必要な実践力と指導能力を身につけることである。

授業内容は表1のとおりである。「総合表現指導法Ⅱ」を受講している3年次生（88名）を4グループに分け、オペレッタ公演に向けてグループごとに指導をした。指導は、造形表現、音楽表現、身体表現、言語表現および幼児教育への応用に関する指導を担当する複数教員によるチーム・ティーチングにより実施した。授業期間は令和2年4月～8月までの18回（1回180分）である。18回の授業を通して、グループごとにオペレッタ作品を作り上げ、最終日に無観客で公演を行った。無観客での公演であったことから、観覧機会を確保するため、公演の様子を録画してB学科のHPで公開した。授業は、新型コロナウイルス感染予防対策による休講等の影響や、各グループの進捗状況等に応じて、計画を適宜変更しながら実施した。

表1 授業内容

時間	授業時間																	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
授業形式	対面授業		遠隔授業(Zoom)			対面授業, 遠隔授業 *人数制限し, 対面と遠隔のハイブリッドで実施												
授業内容	グループ分け・役割分担 オリエンテーション	資料収集と演目の決定	脚本作成			通し稽古												
			<ul style="list-style-type: none"> <li>今後の授業方針説明</li> <li>脚本の読み合わせ</li> <li>登場人物のキャラ設定</li> <li>音楽表現のイメージ共有</li> <li>物品購入の確認・発注</li> </ul> <提出書類> ※提出はKeli ・制作企画書 ・キャラ設定シート ・脚本	<ul style="list-style-type: none"> <li>全体説明</li> <li>グループごとに通し稽古, 道具の制作</li> <li>音楽表現(歌, 効果音等)の確認, 練習</li> <li>動き(ダンス, 空間構成)の確認, 練習</li> <li>背景や大道具の制作</li> <li>小道具, 衣装の制作</li> </ul> ・通し稽古の様子を撮影し, 映像をStreamで共有 *客観的視点の獲得	リハーサル	本番リハーサル	本番・撮影											

\* 新型コロナウイルス感染予防対策による休講等の影響や各グループの進捗状況等に応じて、計画は適宜変更しながら実施した。

### 2.3 授業実践

第1回に、無作為のくじ引きにより学生を4つのグループに分けた。これは新たな人間関係を構築しながら活動に取り組んでいくことで、保育者に必要なコミュニケーション能力や共感力を高めることを意図した。各グループで作品のテーマを検討し、子ども達に伝えたいテーマに合わせたオリジナルの物語、または、絵本や昔話などの原作を参考に脚色・創作した物語を作成するよう指示をした。グループごとに、リーダー1名、サブリーダー2名を決め、残りのメンバーは、身体表現・造形・音楽・脚本の4パートに役割分担をして創作活動をすすめた。

第2回は、グループ毎に子ども達に伝えたいテーマと演目を決定し、脚本係を中心としてテーマに沿った脚本作成と登場人物のキャラクター設定の作業に入った。

第3回から第5回は、政府の緊急事態宣言（令和2年4月7日）を受け、Zoomを用いた遠隔授業を行った。Zoomのブレイクアウトセッション機能を用いて、グループごとに脚本の推敲や読み合わせ、キャラクター設定等に関するグループワークを行った。脚本の読み合わせでは、複数の担当教員がセッションに加わり、登場人物の設定に応じた言葉の使い方や声の出し方、話し方などを指導した（図1）。

Keliを用いて、遠隔授業に必要な授業資料、脚本や企画書等のフォーマットデータを配布した。グループごとに作成した企画書や脚本、キャラクター設定シート等の提出先としてもKeliを使用した。授業内での指導やグループ活動を通して変更した脚本は、毎回授業後にKeli提出してもらった。提出された脚本は教員が内容を確認し、必要に応じて添削して指導にKeliを使用した。企画書やキャラクター設定シート等の書類については、内容を変更した時点でKeliに提出できるようにした。

動画資料としてこれまでに作成されたオペレッタ作品<sup>12)</sup>をMicrosoft Streamを用いて掲示した。学生がまず、総合表現“オペレッタ”のイメージを掴むことができるように、従来は、授業内で視聴していたものである。今回は、授業時間はグループ活動を行う時間として有効活用できるようにするため、授業時間外にも学生が自由に視聴できるようにした。好きな時間に、観たい部分を何度でも視聴できるというICTの特徴を活用したものである。

令和2年6月に入り、大学全体としてはオンラインによる遠隔授業を中心しつつ、実習・実技、演習など一部で対面授業を実施するという対応が行われた。それに伴い第6回以降は、人数を絞って対面授業によるグループ別の指導を行いながら、Zoomを用いた遠隔授業や、継続的にICTを活用した資料や動画の共有等を行うなどハイブリット型の授業形態をとることとした。

対面授業の内容として、造形表現では、背景や大道具等の広い制作場所や集団での制作が必要となる活動を行った。小道具や衣装に関しては、造形係を中心に、学生が個々の自宅において制作を進め、登校時に持参するようにした。音楽表現では、実際にピアノや小楽器に触れて音を確認しながら、場面に適した効果音やBGM、テーマに沿ったオリジナルの曲を作成した。身体表現では、登場するキャラクターに応じた演技やダンスの振り付け、隊形の確認をした。

遠隔授業の内容として、造形表現では、各自が自宅で進めていた衣装や小道具をZoom画面上に映してもらい、それを見て助言・指導を行った。音楽表現では、自宅にあるピアノやキーボードで作成した曲や効果音を弾いてもらい、曲の流れや伴奏の助言をした。作成した曲は五線譜に譜面を起こし、Keliで提出してもらった。身体表現については、



図1 Zoomを用いた遠隔授業の様子



図2 ソーシャルディスタンスを保った演技

対面授業で行った通し稽古の様子を撮影し、動画を Microsoft Stream で提示することで、各グループや学生間で互いに視聴して評価できるようにした。これは、自分たちの作品を通して発信する表現を可視化し、客観的に観ることで、「創る側」からの視点だけでなく、「観る側」の視点にも重きを置きながら作品を作り上げていくことを意識する動機付けに繋がると考えた。伊藤ら<sup>6)</sup>が指摘する、「学生たちはオペレッタを観る側の視点での気づきが弱い」ことを補完するとともに、第三者が観ることを意識付けする指導の強化を目指したものである。

第18回目の令和2年8月8日に、無観客でオペレッタ公演を実施した。実施に際しては、新型コロナウイルス感染防止のため、ソーシャルディスタンスの保持、手指および小道具の消毒等の十分な対策を取った。発表作品は録画、編集して web 上で公開した<sup>7)</sup>。

授業終了後には、授業担当者5名が集まり、授業の振り返りを行った。

### 3. 調査方法

オペレッタ公演終了後に、受講学生を対象として質問紙によるアンケート調査およびインタビュー調査を実施した。

#### 3.1 アンケート調査の方法

「総合表現指導法Ⅱ」受講学生88名のうち、途中で履修を辞退した1名を除く87名（男性1名、女性86名）に対して、集合調査法によるアンケート調査を実施した。調査日は令和2年11月10日であった。調査内容は、①言語表現指導、②身体表現指導、③音楽表現指導、④造形表現指導、⑤総合表現全体の項目について「授業の満足度」を5段階評価および自由記述で回答してもらった。回収数は74件（回収率85.1%）であり、そのうちアンケート調査への協力

が得られた68件を分析対象とした。

#### 3.2 インタビュー調査の方法

インタビュー調査の対象者は、各グループのリーダー4名（B, D, F, H）およびサブリーダー4名（A, C, E, G）の計8名とした。サブリーダーはグループに2名ずつ設けていたため、2名の話し合いで対象者を選出してもらった。対象者の属性を表2に示す。今回、遠隔と対面のハイブリット授業を実施したことから、学生は授業時間外でも ICT を活用していることが想定された。オペレッタ授業において、グループのリーダーおよびサブリーダーは、グループをまとめて率いていく役割と、教員と学生の間を繋ぐ役割が求められていることから、他の学生よりも ICT を活用する機会が多いと考え、インタビュー対象者として選出した。

調査日は、令和2年11月19日であった。インタビュー時間は一人20分程度を目安として、作成したインタビューガイドを用いた半構造化面接を行った。質問項目は、①オペレッタ公演に向けて工夫したこと、②オペレッタ授業において ICT 機器を用いて行うメリットはどのようなことか、③オペレッタ授業において ICT 機器を用いて行うデメリットはどのようなことかである。インタビュー内容は、対象者の同意を得て IC レコーダーに録音した。インタビュー調査で得られた回答から、「ICT の活用」に関して触れている内容についてまとめた。

### 4. 結果

#### 4.1 アンケート調査の結果

アンケート調査の結果を表3に示す。「授業の満足度（以下満足度とする）」に関して5段階評価（5 満足、4 やや満足、3 どちらともいえない、2 やや不満、1 不満）で回答してもらい、それぞれ5点、4点、3点、2点、1点として算術平均を算出した。平均値が高い方から「総合表現全体」が3.95、「音楽表現指導」が3.94、「言語表現指導」が3.92、「造形表現指導」が3.86、「身体表現指導」が3.68であった。

授業の満足度に影響を与えた要因を探るために、満足群（「5 満足」および「4 やや満足」と回答した者）と、非満足群（「3 どちらともいえない」および「2 やや不満」、「1 不満」と回答した者）の自由記述の内容を検討した。「3 どちらともいえない」に関しては、学生が回答した記述内容をみると、授業に満足していないという内容の記述が多くみられたことから、今回は非満足群として扱うこととした。満足群では、「セリフ合わせは遠隔でできるため、家と学校で優先順位を立てるとよくできた部分もあった」「たくさんさんのアドバイスや指導があってオペレッ

表2 インタビュー対象者の属性

対象者	グループ	役割
A	a	サブリーダー
B	b	リーダー
C	d	サブリーダー
D	c	リーダー
E	b	サブリーダー
F	d	リーダー
G	c	サブリーダー
H	a	リーダー

表3 「総合表現指導法Ⅱ」の授業満足度

	満足群		非満足群			n	平均値	SD
	満足 (%)	やや満足 (%)	どちらともいえない (%)	やや不満 (%)	不満 (%)			
言語表現指導	15 (23.0)	35 (53.8)	11 (16.9)	3 (4.6)	1 (1.5)	65	3.92	0.85
身体表現指導	11 (16.9)	28 (43.1)	21 (32.3)	4 (6.2)	1 (1.5)	65	3.68	0.89
音楽表現指導	14 (21.5)	37 (56.9)	11 (16.9)	2 (3.1)	1 (1.5)	65	3.94	0.81
造形表現指導	17 (26.2)	29 (44.6)	14 (21.5)	3 (4.6)	2 (3.1)	65	3.86	0.97
総合表現全体	19 (29.2)	32 (49.2)	7 (10.8)	6 (9.2)	1 (1.5)	65	3.95	0.96

表4 満足度\*の自由記述内容 (抜粋)

- ・グループの人との話し合いや日々の練習を通して、その都度良いものにしていくことができた。
- ・セリフ合わせは遠隔でできるため、家と学校で優先順位を立てるとよくできた部分もあった。
- ・性別の違い、年齢の違いから動きの部分で悩むことが多くあったけど相談にのってもらえた。
- ・登場人物1人1人の設定も細かく、場面にあった演技・ダンスになっていた。
- ・効果音の相談や歌のところをたくさん見ていただいた。
- ・家で衣装を作るなど(時間を)有効活用できた。
- ・始める前に今日の予定をしっかりと話し合い、家ですること、人と会いすることの計画をしっかりとできていたのでよかった。
- ・(先生が)具体的な改善案を示してくれて、その後グループで話し合いの時間をくれたのでより良いものができた。
- ・たくさんのアドバイスや指導があってオペレッタを完成させることができた。
- ・お客様の前でやりたかったという気持ちが強く残るくらい満足のいく作品ができたから。
- ・この状況の中でできるかぎりのことはしたし、毎回の練習をしっかりとやる気を持って行うことができたと思う。

※満足群(「5 満足」および「4 やや満足」と回答した学生)の自由記述をまとめた

表5 非満足群\*の自由記述内容 (抜粋)

- ・結局、対面でないと話が進まないから。
- ・間隔を開けることで演技、ダンスの幅が減りに減った。
- ・密になるので思ったような演技ができなかった。
- ・対面が限られた時間しかなかったので音楽を触りながら、音がつけられず、苦戦した。
- ・遠隔で進めることや授業内で終わることが難しく、もう少し追求したい部分もあったため。
- ・遠隔でのグループの話し合いは意見が出しにくい、聞いているのかも分からないことがあった。
- ・Zoomではあまり話し合いも何もすすまなかった。
- ・一部の人の負担が多く、達成感をあまり感じられなかったから。
- ・準備時間が短すぎた。
- ・もっと時間があれば良くできたと思う
- ・先生の指導に偏りがあって頑張っているのに楽しく感じなかった。
- ・もっと教えて欲しかった。
- ・班によって指導のバラツキがある。

※非満足群(「3 どちらでもない」、「2 やや不満」および「1 不満」と回答した学生)の自由記述をまとめた

表6 「ICTの活用」に関する語り（必要か所の一部を抜粋）

1 連絡方法	[C] 電話とかLINE. 全体とそれ（パート）ごとにLINEグループ作った. 早くしてほしい時は電話しちゃう. / [F] グループの中での連絡方法は, ほぼLINE. 集まってるときに口頭で伝えて, それを詳しく書いたのを画像で撮ってLINEグループでって感じだった. それが一番多かった. Zoom (授業) の時間じゃなくてもZoom使って何回か, ミーティング開くやつを自分たちでして, 話し合ってた. / [H] 各グループの全体LINEだけじゃなくて, (他の) リーダーと副リーダーで電話したり, 中心になってくれる子も入れて電話した. (中略) 休んじゃった子にもLINEで全部で送ってました, 写真付きで資料.
2 学外でも意思疎通が図りやすい	[D] 対面のときは直接言えない子とかは, ラインとかを使って言える / [B] LINEの投票だったら, (意見が) 言いにくいっていうのも, 押せばいい. / [E] いつでも連絡が取れるっていうのが一番大きかったし, 聞いたときにすぐ聞けるっていうのがありました. / [G] Zoomとかで画面をonにしたら全員の顔が見えるから, 対面のときより1人1人の顔を見ながら, いっぺんに見れて (話が) できる.
3 情報の取得・共有の簡便性	[A] イメージは伝えやすいですね. 作る物のイメージとか, 色とか, 画像を拾ってきてこういうのを作ってたっていうのはLINEで共有してました. / [C] 動画をLINEとかで共有した. いつでも見れるのがいいですね. 自分で確認できて, すぐ相談できるってところ. 音楽も, youtubeの飛ぶやつとかで (共有して) この曲聞いてって. / [G] 壁紙とか作るのに時間がかかるから. (デジタルだと) 家へ持ち帰ってもできる. / [H] 曲これにするからって, 音源を直接入れ込んで (共有した). 見本でダンスの振り付けの班の子が踊ったのを送ってもらって, 来週までに覚えてきてね. 歌の歌詞もこの音程に合わせて歌ってきてねみたいな.
4 改善点等の視覚化・明確化	[C] 細かいところがみえる. 大きくして, ピンポイントでいけるから, どこどこって言うよりかは (伝えやすい) / [E] 動画とか撮って見直したりしたのは, 使えるなって思います. そのビデオがあったおかげで, もっとこうの方がいいっていうのが喋りやすくなって, 曖昧な話で終わらずにちゃんとここはこうしようっていうのを明確にわかるので. / [G] 口頭じゃわからないこととかも, 文章化することで, 視覚的にわかるんで, 見直したりもできるから.
5 使用者の対応	[A] LINEで既読だけついてほぼ返事ないとかっていうのがすごいあって, ちゃんと理解できてるの? みたいな. / [B] (Zoomは,) 顔が見えないとこでやっちゃうと, 何しとるかわからん. そもそもZoomに入っていない人もいる. / [H] LINEしても1週間後とかに返ってきて, もうその話終わってるよって. だから, 意思疎通ができない.
6 ICT活用の不慣れさ	[A] Zoomの中でブレイクアウトセッションしてもって感じ. 声だけ, 顔が見えないなかで口火を切るのも, タイミングも間も図りにくい. みんなが使い慣れてないからもあるかも. / [B] みんなの顔が見えないとこでやっちゃうと, 何しとるかわからんっていうのが. そもそもZoomに入っていない人もいる. / [E] (Zoomで) 話し合いですって言われても誰もミュート外しづらくって. 話づらいですよね, ミュート外すまでがみんな. ミュート外そうよって (先生が) 最初に言わんと無理な感じだし, 言っても反応がない. / [H] 何か止まったり切れたりするから, 出席してるけど音が出なかったって言われて, 読み合わせが出来なかった.
7 新しい表現方法	[D] 本当は壁面を作るって話だったんですけど, 背景はいらなくてゴタゴタしたんです. だったらプロジェクター (で映す) かって. 動画作れる人いるから, 他のところとは被らないやり方をしたいよねっていう.

タを完成させることができた」等の回答がみられた (表4). 非満足群では, 「遠隔でのグループの話し合いは意見が出しにくい, 聞いているのかも分からないことがあった」「対面が限られた時間しかなかったので音楽を触りながら, 音がつけられず, 苦戦した」「班によって指導のバラツキがある」等の回答がみられた (表5).

インタビュー調査の対象者は表2のとおりである. また, 「ICTの活用」に関する語りをまとめた結果を表6に示す. 多くの学生に共通するICTの活用に関する点は以下のとおりであった.

- ①グループ内およびリーダー間の連絡手段としては, ほぼLINEが用いられていた. LINEによる文字でのやり取りを基本として, 必要に応じて音声通話や写真・動画等の共有を行っていた.
- ②学生が考えるICTの利点は, いつでも連絡が取

れること, 意思疎通が図りやすいこと, 情報の取得や共有が簡便であることであった.

- ③ICT機器等を活用して動画を視聴したり, 口頭での指示を視覚化したりすることで, 改善点や課題等が具体的かつ明確に見えるようになった.
- ④ICTを利用しようとしても, 使用者の対応によっては有効に利用することが難しい場合があった.
- ⑤ICT機器や使用方法に不慣れさがあった.

## 5. 考察

### 5.1 授業実践に関する考察

本研究は, 「総合表現指導法Ⅱ」オペレッタ授業において, ICTを活用した遠隔指導の可能性を探ることをねらいとした授業の実践を報告し, また, 学生への調査からその成果について考察することを目的としている.



授業実践より、ICT を活用することで、従来は紙媒体で行っていた脚本など文書でのやりとりをデータに移行することができた。脚本や演出は、作品を完成させていく過程においてブラッシュアップされ、最後まで流動的に変化していく。脚本をデータ化したことで、加筆修正の共有が容易となり、密に教員とやり取りが行えるようになったことは、作品作りの過程に即応した細やかな言語指導や演技指導が可能となった。音楽や造形では、ICT 機器を用いることで、実際に制作した曲やイメージに近い制作物をすぐにその場で提示することができた。漠然とした感覚的な音や物のイメージを他者と共有しやすくなり、登校制限という時間的・環境的に制約のある中での共同制作の効率化に繋がったと考えている。

撮影した動画を Microsoft Stream で共有したことは、学生それぞれが時間や場所を選ばず動画を観返しながら演技やダンスの反復練習をすることができ、個々の習熟度にあわせた個別練習が可能となった。小島と岩居<sup>8)</sup>は、ICT を活用して、自己の動きを何度も視覚的に観返すことは、ダンス創作過程における技能と表現力の向上に有用であるとしている。

これら視覚的・聴覚的に多くの情報を素早く伝えられるという ICT の利点は、今回のように限られた時間の中でメンバーが共同して作業を進めていく上での強みとなったと考えられる。

しかしながら、ICT 機器を利用するにあたり、通信環境によってタイムラグが生じることは、人と人との会話の間や言葉のタイミングによる感情の表現など、非言語的な表現部分における指導や、“そろえる” 必要性がある合唱や楽器演奏等の音楽表現に関する指導は、ICT 機器を利用しても指導は困難であった。

オペレッタ公演に向けて、作品を作り上げていく過程においては、実際に演技をしながら様々な表現を模索し、より良い表現方法を構築していく過程が必要である。学生が実際に思考しながら手を動かしている際の指導は、学生の理解を深め、そこから創造的展開が可能となる場合が多いため、その部分はどうしても対面で行う必要がある。それらのことが遠隔でのオペレッタ授業の限界と推察する。

## 5.2 調査に関する考察

アンケートの結果から、「総合表現全体」の項目における満足度をみると、学生の授業自体への満足度はおおむね高かったと考える。満足度に関して、自宅で個別に行う活動と登校時に集団で行う活動を明確化して取り組んだことは、学生の満足感に繋がったと推察される。南谷<sup>9)</sup>は、創作オペレッタの

制作過程において、学生は「製作にかかる時間」と「練習時間の少なさ」を問題だと認識すると述べている。今回は、特に制限ある活動時間や環境の中で、効率的かつ有効的に活動を進めていくために、計画性や見通しを持って活動に取り組んだことが、それら問題の軽減に繋がったと推察する。この経験は、限られた材料や時間を駆使して教材準備を行うことが求められる保育者として、保育現場で活かしていくことのできる意義深い経験であったと考える。

また、コロナ禍という制約の多い状況であっても、オペレッタ作品を作り上げ演じることができたという達成感は、満足度に大きな影響を与える要因であったと推察する。古屋<sup>3)</sup>は、オペレッタ創作活動の達成感は学生に満足度・充実感をもたらしたと述べており、本実践も同様であったといえる。

一方、授業に満足できなかった要因として下記の点について推察する。

まず、他の項目に比べ身体表現指導における満足度が低かった。これは、舞台上での演技指導やダンス指導など、直接的に空間や場所を利用して目の前で指導をする時間が少なかったこと、また、感染予防のため、直接的な身体接触を避ける演技や舞踏が求められたことで、学生が表現の幅が狭まったと感じたことが影響を与えたと推察する。田中と佐藤<sup>10)</sup>が述べるように、身体を通した人との関わり合い、時空間と感情の共有や協働体験、表現に至るまでの過程は、対面授業でしか学び合えない点であろう。それは遠隔授業における指導の限界であると考ええる。

次に、学生は Zoom を用いた遠隔でのグループワークに不慣れであったことがあげられる。遠隔でのグループワークの不慣れさは、グループ形成の初期段階においてメンバー同士のコミュニケーションに影響を与え、その後、メンバー内の関係性が向上したとしても、当初のネガティブなイメージは授業の満足度に影響を及ぼしたと考える。田場と石垣<sup>11)</sup>は、オンライン上グループワークにおいて、グループの人間関係が安心して自由に発言できる環境であったことで、学生はやりがいを感じられるとしている。ICT を活用したグループワークの実施にあたっては、ICT の特徴を理解した上で互いのコミュニケーションを深める方法を検討し、グループ形成の早い段階で、意図的に演習活動に取り入れていく必要があることが示された。

最後に、指導をする教員側の課題である。教員側としても ICT 知識・技術の習得が不十分であり、ICT 機器の操作に不慣れであった。ICT 機器を用いることで、技術的には指導が可能であったかもし

れないが、教員の持つ知識・技術では、学生への十分な指導助言に繋がらなかったと推察する。それらを実現するためのICT機器の知識・技術の習得を含め、満足できなかった要因をいかに補完していくかが今後の課題である。

インタビュー調査の結果から、学生は、普段使い慣れているLINEを用いてグループ内またはグループ間の連絡手段としていた。LINEは、文字でのやり取りを基本として、必要に応じて写真や動画等の共有に使用しや音声通話を用いていた。いつでもどこでも情報のやりとりができるというICTの利便性は、集団活動の過程において有用であった。また、撮影動画のふりかえりを通して、客観的な視点を持って創作活動を進めていくことの意識付けができたと考える。作品の課題が明確化し、具体的な改善点をグループメンバーで共有できたことは、活動に取り組む意欲の向上にも繋がった。一方、ICTを活用するにあたり、使用者の対応や経験によっては有効活用することが難しい場合があることが示された。

以上のことは、実践の結果とも概ね一致している。

## 6. まとめ

本研究では、「総合表現指導法Ⅱ」オペレッタ授業において、ICTを活用した遠隔およびハイブリット授業の実践事例を報告し、受講学生への調査からその成果を探ることを目的とした。

- 1) 学生の授業に対する満足度はおおむね高値を示したことから、制限の多い環境下であっても、授業および公演を行ったことは意義があった。
- 2) 学生は、普段使い慣れているSNSであるLINEをグループ内またはグループ間の連絡手段としていた。

- 3) 場所を選ばず、いつでも視覚的・聴覚的に多くの情報をやり取りできるというICTの利便性は、学生の個別活動の一助となり、時間的な制約のある中で、学生同士が共同して作品創りを進めていく上での強みとなった。
- 4) 紙媒体の提出資料等をデータ化したことで、加筆修正の共有が容易となり、教員が即応した細やかな言語指導、演技指導を行うことができた。
- 5) 通信環境によるタイムラグや画面の上での対面関係にない言葉のやりとりでは、非言語的な表現部分における指導は困難であった。実際に演技をしながら、より良い表現方法を模索していく過程においては、対面で行う必要があり、遠隔指導の限界が示唆される。
- 6) 教員が具体的な改善点や到達点を示して教育指導することで、学生の満足感を高めることが示唆された。
- 7) 教員と学生双方のICT機器を利用する不慣れさや、遠隔で「表現」を指導していくことの限界は、満足できなかった要因と推察された。

時間・場所を選ぶことなく、感覚的イメージの共有が容易であり、短時間で多くの情報をやり取りできるというICTの利便性は、「総合表現指導法Ⅱ」オペレッタ授業を遠隔で実施する際の大きな一助となった。このことは、表現系演習科目の遠隔による指導の可能性を示唆している。しかしながら、他者と関わり合い、時空間と感情を共有して一つの表現作品を作り上げていく過程は、対面でしか成しえないものである。これは遠隔による表現指導の限界であることが示唆された。今後、ICT知識・技術の習得を含め、継続的に授業教材の改善を行い、ICTの強みを活かした新たな演習科目における活用の在り方を検討していきたい。

## 倫理的配慮

研究に際しては、研究の主旨・参加が自由意思であること、協力の有無が成績には一切関係しないこと等を説明し、研究協力の承諾の得られた学生のみを対象とした。アンケート調査に際しては、調査票に本研究の目的と内容、プライバシーポリシーを明記し、調査票のチェックをもって調査協力への同意を得られたものとした。インタビュー協力者には、口頭および文書にて、調査主旨、自由意思による調査協力で不参加による不利益は一切ないこと、個人情報の保護、結果の公表等について説明し、対象者の自署による同意書の提出により調査協力への同意を得た。本研究は、川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号20-034）。

## 謝 辞

本研究は、令和2年度川崎医療福祉大学の医療福祉研究費の助成を受けて実施した。研究の遂行にあたり、ご協力くださいました学生の皆様、ならびに身体表現分野に関する丁寧なご指導・ご助言をくださいました秋政邦江先生に心より感謝申し上げます。なお、本稿は日本保育学会第74回大会および日本保育者養成教育学会第6回研究大会において発表したものを元に加筆・修正した。



## 注

- †1) 現在は、Keli に替わる学習支援システムとして WebClass が整備され、講義の運営に用いられている。
- †2) B 学科の前身である C 短期大学 D 科では、設立当初から保育者に必要な感性や表現力、技能を培い、また、集団での創作活動を通じた人間関係力の向上を目的としてオペレッタ授業を行ってきた。それらの作品の中から、5つの作品を Microsoft Stream で掲示した。

## 文 献

- 1) 秋政邦江, 尾崎公彦, 青井則子, 伊藤智里: 医療保育課におけるオペレッタ授業の実践報告. 川崎医療短期大学紀要, 28, 59-63, 2008.
- 2) 宮本智子: 保育者養成校におけるオペレッタ授業の効果—表現力の観点から—. 国際学院埼玉短期大学研究紀要, 28, 19-27, 2007.
- 3) 古屋祥子, 沢登美美子, 高野牧子: 保育者養成校におけるオペレッタ創作活動の教育的効果—2011年度「総合表現演習」の実践から—. 山梨県立大学人間福祉学部紀要, 7, 31-48, 2012.
- 4) 文部科学省: 高等教育における ICT 活用教育について.  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/043/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2018/09/10/1409011\\_5.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/043/siryo/_icsFiles/afieldfile/2018/09/10/1409011_5.pdf), 2018. (2023.11.1確認)
- 5) 文部科学省: 教職課程コアカリキュラム.  
[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442\\_1\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf), 2017. (2023.11.1確認)
- 6) 伊藤智里, 青井則子, 秋政邦江, 尾崎公彦: オペレッタ授業における学習者自身による自己評価—客観的視点を養う評価シートの作成—. 川崎医療短期大学紀要, 30, 77-82, 2010.
- 7) 川崎医療福祉大学子ども医療福祉学科: 第61回保育学生研究大会 (オンデマンド) にて第14回オペレッタ発表会を発表しました. <https://w.kawasaki-m.ac.jp/kodomo/category/%E5%AD%90%E3%81%A9%E3%82%82%E5%8C%BB%E7%99%82%E7%A6%8F%E7%A5%89%E5%AD%A6%E7%A7%91/%E3%82%AA%E3%83%9A%E3%83%AC%E3%83%83%E3%82%BF/>, 2020. (2023.11.1確認)
- 8) 小島理永, 岩居弘樹: ダンス創作過程における表現力向上に向けた ICT 活用の有用性研究. 大阪大学高等教育研究, 6, 15-25, 2018.
- 9) 南谷悠子: 協働する経験は保育者養成校の学生にどのような影響を及ぼすのか—創作オペレッタの活動過程に着目して—. 鈴鹿大学教職教育センター紀要, 3, 48-60, 2022.
- 10) 田中葵, 佐藤文: オンラインによる身体表現授業の実践報告—授業から見てきた学生の学びと課題—. 日本保育者養成教育学会 第5回研究大会 プログラム・抄録集, 103.
- 11) 田場真理, 石垣恭子: オンライン上グループワークにおける学習効果に繋がる学生の態度と認知の関係. コンピュータ&エデュケーション, 50, 72-77, 2021.

(2023年11月7日受理)

## Development of Classes Using ICT in Operetta as Comprehensive Expression in Childcare Worker Training

Tomoko FUJISAWA, Kimihiko OZAKI, Noriko AOI, Keita IRIE, Koji SHIGEMATSU,  
Hiroko OKAMASA, Yusaku MATSUMOTO, Akiya TANEMURA,  
Tomoyuki NAKAGAWA and Hayato HASHIMOTO

(Accepted Nov. 7, 2023)

**Key words** : operetta, comprehensive expression, ICT, childcare worker training

### Abstract

In 2020, to comply with COVID-19, we became a distance-learning program. We looked for ways to continue to provide students with learning opportunities. We focused on teaching methods using Information and Communication Technology (ICT). The purpose of this study is to report on the practice of using ICT in an operetta class as a general expression, and to discuss the results of the class by surveying the students. We taught 88 third-year students in preparation for an operetta performance. The classes were conducted both in a remote format and in a hybrid format of face-to-face and remote. As a result, students' satisfaction with the class was generally high, and it can be said that the class was meaningful. The universality of ICT, which allows students to exchange a great deal of information visually and aurally at any time and in any place, helped students' individual activities, and was an advantage for students to collaborate with each other in creating their works under time constraints. On the other hand, the time lag caused by the communication environment made it difficult to provide instruction in non-verbal expression and musical expression such as singing and playing instruments. The process of searching for a better method of expression while performing an operetta should be done face-to-face, and this was suggested to be a limitation of remote instruction.

Correspondence to : Tomoko FUJISAWA

Department of Medical Welfare for Children

Faculty of Health and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : [t.fujisawa@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:t.fujisawa@mw.kawasaki-m.ac.jp)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.33, No.2, 2024 281 – 290)